

ブナの森新聞

令和4年冬号 第21号

発行：ブナの森調剤薬局
〒990-0039 山形県山形市香澄町1-18-7
電話 023-674-9250
編集責任 鈴木 康久
ブナの森新聞HP <https://www.bunanomorinews.com/>

元内閣官房副長官

古川 貞二郎さんをしのぶ

かけがえのない先輩であり
師であった
元宮内庁長官 羽毛田 信吾

いつ頃のことだったろうか。古川さんと車に乗り合わせた折、「今、山形の地域新聞に出す原稿を書いているんだよ。いくつになっても書くという作業は楽しいものだね。書くことで自分の考えも整理されるしね」と嬉しそうに話された。元気いっぱい知的好奇心旺盛な先輩に羨ましい気がしたものである。それが、まさかのご急逝。今、「ブナの森新聞」秋号の巻頭論文「私が関わった印象深い社会保障制度改革（元内閣官房副長官古川貞二郎）」を前にして、あらためて人の命の儚さを痛切に感じている。

官界における古川さんの業績は、既に新聞紙上などで多くの人が述べているところであり繰り返さないが、事に臨んで的確な判断と揺るぎない信念には常に畏敬の念を抱いてきた。本誌にも執筆された「政と官」の問題などで示された見識は、官界に生きる者が範とすべきものだと思う。

何度か部下としてお仕えし、また同じポストに就くことの多い巡り合わせだった私にとっては、古川さんは、かけがえのない先輩であり、師であった。まさに賢兄愚弟。何度も窮地を救っていただき、行く路に迷う私に的確なアドバイスを下さった。「積極で行くべきか、消極で行くべきか迷ったときは、積

極を選ぶ」。難題にも臆せず立ち向かった古川先輩のこの言葉に背中を押されて判断できたことも一再ならずある。

しかし、古川さんは、私の心の中では頼りがいのある先輩、よき師という以上に、年の離れた親しい友という存在だった。お互い草深い田舎に生まれ育ったことから、会えば子供の頃の思い出や農作業の話に花が咲いた。朝早くに採れた野菜をリヤカーに積んで町の市場まで運んだ中学生の頃のことを愛おむように語られた。私も、桑摘みの思い出などを話し、思いはいつしか中学生の昔に帰るのであった。

酒席で、古川さんが兄事された今は亡き藤森さん（元内閣官房副長官・宮内庁長官）と繰り広げられる佐賀と長野のお国自慢をそばで楽しく聞いたことなども思い出す。古川さんは、ご家族や郷土佐賀をこよなく愛する人もあった。母上への思いを小説に託された作品「鎮魂 ハルの生涯」は、人間古川貞二郎の情の厚さを余すところなく伝えている。

私は、ふと「みちのくの母の命を一目見ん一目見んとぞただにそげると詠った山形県が生んだ大歌人斎藤茂吉と通ずるものを感じた。功なり名遂げても変わらぬ母への思いや郷土への愛着。二人とも、一生を通じて心の中に田舎人の純情、土の香りを保ちつづけたのではあるまいか。そう言えば、

茂吉は、生涯山形弁のアクセントが抜けなかったというが、古川さんの言葉のアクセントも九州人のそれであった。

先日夜半、半藤末利子さんのエッセイ集を読んでいて、古川さんと共通の友人のことを書いた文章に行き逢った。「きっとこの話は古川さんなら興味を持って聞いて下さるのに、話すべき古川さんはもうおられないのだ」と、あらためてたまらない寂しさを覚えたことだった。

山形には直接関係の無い個人的な感傷を書き連ねてしまったが、「ブナの森新聞」の常連執筆者だった古川さんの思い出を読者の皆さんと共有したいとの一心で筆を執った次第である。意を尽くさぬところはお許し願いたい。

専門紙記者が見た 古川貞二郎さん

吉川 尚利

元内閣官房副長官の古川貞二郎さんが9月5日に亡くなり、突然の訃報にとっても驚きました。「ブナの森新聞」の鈴木編集長から、追悼文執筆の依頼を受けましたので、拙文を寄稿させていただきます。

厚生労働省（平成13年まで厚生省）には、一般紙の記者クラブ「厚生記者会」と、専門紙・誌の記者クラブ「厚生日比谷クラブ」があります。私が「厚生日比谷クラブ」に入会した当時（昭和57年）、古川さんはすでに保険局企画課長（保険局筆頭課長）で、「新米記者」が容易に取材できる立場ではありませんでした。

昭和56年当時、厚生省は老人保健法の創設や健康保険法の改正という重要法案を抱えていました。老人保健法は、昭和48年に導入された老人医療費自己負担の無料化の方向転換を図るもので、国会の法案審議では野党はじめ老人団体の反対が強く、また、健康保険法の改正は健康保険本人の一部負担に定率負担を導入するもので、野党や関係団体への説明・折衝に当たられました。

昭和59年には健康政策局総務課長として、戦後初の医療法の抜本改正に取り組み、現在につながる医療施設体系の確立に尽力されました。当時の政治状況は、法案審議を巡り与野党間で厳しい駆け引きが行われ、老人保健法は法案提出から成立まで3国会、1年3か月、医療法改正については、昭和58年3月の法案提出から成立まで継続審議、廃案を繰り返し、6国会を経て昭和60年12月に成立しました。特に、昭和60年当時は大臣官房審議官（医療保険担当、老人保健担当）として、与野党担当議員との調整、折衝を担い、大変苦勞されたことと思います。

古川さんが厚生事務次官当時の平成5年、自民党、社会党によるいわゆる政治の55年体制が崩壊し、非自民8会派（日本新党、日本社会党、新生党、公明党、民社党、新党さきがけ、社会民主連合、民主改革連合）による細川護熙内閣が発足しました。それまでは主に政権与党の自民党の了承を経て、

政府の予算や政策が決まっていたが、8会派連立政権となり与党8会派にそれぞれ説明し了承を得るという作業は並大抵ではない労力を費やされたことと思います。

事務次官に就任した平成5年には、省内に「高齢者介護対策本部」を設置し、平成12年の介護保険制度創設の道筋をつけられました。厚生省退官後の平成7年2月には村山富市内閣の官房副長官に就任し、小泉純一郎内閣の平成15年9月まで、内閣の事務方トップとして8年7か月務められました。

古川さんが仕えた村山富市氏、橋本龍太郎氏、小泉純一郎氏は厚生省と関係が深いとはいえ、政局が流動化、不安定ななかで官房副長官ポストを長期間務めるには、古川さんの高い行政能力が必要とされたことの証左であろうと思います。

古川さんに平成30年10月、厚生日比谷クラブのOBで組織する「日比谷会」への参加をお願いしたところ快く引き受けてくださいました。当日は、厚生官僚、官房副長官当時の思い出、政と官（行政）の関係、後輩官僚への思いなどを語っていただき、特に官房副長官の経験をもとに語られた、本来の「政治主導」の在り方に対する見識は今も鮮明に記憶に残っています。

彼岸に旅立った友、 古川貞二郎君 山本 悦夫

シーラカンス

妻がパリで日本画展を開くことになった。そのためパリに出掛けたので、家には誰もいない。所在ないまま、ふと思立って沼津港に行ってみることにした。駿河湾は最深部が2500メートルもある日本では最も深い湾だそう。ちょっと前にNHKの“さかなクン”の番組を観ていたので、駿河湾や沼津港魚市場も自分の目で確かめたいと思った。

沼津港深海水族館には、日本シーラカンス学術調査隊が捕獲したシーラカンス5体が展示されている。そのうち2体は冷凍されていて、巨大なガラスケースの中に展示されている。シーラカンスは3億5千万年の間ほぼ変わることのなかった深海の環境により太古の姿のまま生き永らえているのだそう。それが人間の手によって捕獲されここに運ばれた。

私は、以前から自分自身が古代魚シーラカンスのようだと思っていた。友人から電話があると「まだ生きていたか」と思うことがよくある。この年になると、まだ元気で生きている仲間に出会った時の喜びは若い時には想像できなかったほど大きい。

沼津で、本物のシーラカンスを見て驚いたことが一つある。予想もしていなかったのだが、シーラカンスには背骨がないのだ。背骨の代わりに軟骨でできた中空の管がある。背骨がなくてよく2メートル近くもある巨体を支えられるのだと疑問に思ったが、その答えが体表を覆う固い鱗だった。



新官邸副長官室にて 2003年（平成15年）6月23日



この5月31日、その日は私の88歳の誕生日だったが、早逝した弟の葬儀の日でもあった。その夜床について小用でトイレに立ったところ、ふらついて背中を壁に強打した。東邦大学大橋病院に行き、診てもらおうと脊椎を骨折している。手術をすることになった。手術は成功して、以来、胸にギブスを装着している。ギブスは脊椎に負担を掛けないために着けるのだそうだ。シーラカンスが固い鱗で体を支えているように私も同じようにギブスで体を支えている。やはり私がシーラカンスなのは間違いない。

古川貞二郎君の急逝

沼津港から帰った日の夜、詳しくは日にちが変わって、9月5日の早朝、突然携帯が鳴った。ベッドの中で手を伸ばすと理津子さんの声だった。「主人の心臓が止まった」「病院に救急搬送した。今厚生中央病院にいる」

何という事だ。飛び起きると、外はまだ暗い、早朝四時だった。

沼津に行く前日の電話では、「心臓にペースメーカーを入れるのは10月だな」と言っていた。「なんでもっと早くペースメーカーを入れなかったのだ。馬鹿!」とやっとなら捕まえたタクシーの中で何度も叫びたくなった。

病室に入ると生命維持装置に繋がれた古川貞二郎君が横たわっていた。苦しい呼吸をするような機械の音しかない病室にいる姿は重病人のようだった。だが、手に触れると氷のように冷たい。「馬鹿!馬鹿!」と何度も叫びたくなったが涙だけが溢れてくる。

5時25分、生命維持装置が外された。考えたこともなかったことが起きていた。医師は、心臓が原因ではなく、そのほかのところが原因なので、腹部を切開しなければ詳しいことは分からないと、考えるだけでも怖くなるようなことを言う。主人は日頃、長く寝込みたくはないと言っていたので、そうでなかったからこのままでもいいと、理津子さんが答えた。その通りだ、切開するのはひどい、可哀そうだと私も思った。

それから体を清めるので皆さんにも手伝ってもらおうと看護師さんに言われたが、とてもそれには耐えられずにその場を逃れて病院の外に出た。外は白々と明けていき、通りでランニングする人が意外に多いこと気づいた。お年寄りも走っている。

そう言えば古川君も歩くのが大好きだった。渋谷から三軒茶屋まで歩いて訪ねて来ることがよくあった。私より健康だった古川君がこんなにあつけない世を去ってしまうことが信じられない。タクシーを捕まえた。国道246号から茶沢通りに入るところで携帯が鳴った。理津子さんからだった。「山本さん、居ないものだから心配して、倒れているのではないかとお手洗いの中まで探して歩いた」

私が倒れているのではないかと心配をしてくれたのだ。耐えられないとその場を逃げ出した自分が恥ずかしくかった。何故体を清め

てあげなかったのか。自分の精神が如何にもひ弱なのが情けなかった。

理津子さんに聞くと、救急車で病院に運ばれるとき、もっとゆったりした服装を勧めたものの、お気に入りのシャツにジャケットを羽織ってきちんとした服装で玄関まで歩いて行って、椅子に腰かけて救急隊員を迎えたという。ストレッチャーが到着するまでその姿で隊員の到着を待っていたのだろう。

近頃は服装に無頓着な私の姿を見た古川君から、「山本、年を取ってからはそんな恰好をしてはダメだよ」と、よく注意された。相手の方に失礼になると彼は言うのだ。

そう言えば「大喪の礼」の時は、彼は首席内閣参事官として政府の事務方の責任者という大役を仰せつかったが、何どき、何ごとが起こっても恥のないようにと新しい下着を着け、腹には晒しを巻いて家を出た。その葉隠れ武士の教えを継いだかのような古川君を思い出した。

政治と行政の狭間で耐えながら国家のために尽くして来た古川君の精神が如何に強靱なものか、気ままに生き延びている自分のような者との大きな違いを改めて悟った。

山本より一日早く、おさらばしたい

古川君は、憶えているだけでも生前、新聞や雑誌に二度私の名を出してくれた。

一つは、1984年11月号の月刊『官界』の225ページ「霞が関官僚データバンク—総務担当課長のデータバンク」だ。「①当面の重要施策にどう取り組むか。⑧ギャンブルはやりますか。⑨最近特に面白かった本。⑩一緒に旅したい女性タレント⑪奥さんに言いたいこと。⑫我が家に導入したいニューメディア」などの質問のほかに「⑬親友、付き合いで大切にしたいことは。」という項目があった。

「⑫一緒に旅したい女性タレント」には十朱幸代と彼は答えた。

そして⑬の親友の設問には、他の各省庁総務課長が「嘘をつかないこと」とか「はだかの付き合いを大事にしていること」とか当たり障りのない回答をしているのに、彼だけは「山本悦夫(西亜社長)チエを貸してくれる」と具体的に人名を出して答えている。そんな率直な回答をして差し障りがないのかと、こちらの方が心配をするくらいだが、彼は全く意に介さない。

だが、本当のところ私が彼にチエを貸したことなど、何ひとつない。第一、互いの仕事の内容を真面目に話したことはないのだから。大学の同窓の友人はほとんど役人や大企業に勤めて、私のように商売を始めて、零細企業を経営した友人は一人もいない。私だけが唯一小さい会社を起こした。そして羅針盤のない荒野を歩いて細々とした道を歩いた。国会議員、官僚、大企業の社員、役員の世界とは異なり、私の舞台は社会の大部分を占める庶民の世界だ。だから「チエをかくしてくれる」ということは、私と話をすると、社会の大部分を占める庶民の考えが分かるから為になるという意味なのだと思は解した。

もう一つは、『日本経済新聞』の「交遊抄」だ。これにも古川君は親友として私一人だけあげてくれた。そして、「山本君より一日早くおさらばすること」と書いている。普通、立場のある人はこうは書かない。彼はあくまで率直である一方、男気があった。

以下が平成18年2月24日付『日本経済新聞』の「交遊抄」の写しだ。

【交遊抄】一率直な意見

1960年、旧厚生省に入るため上京した私は山本悦夫君と知り合った。それまで一面識もなかったが、九州大学の同窓であることがわかり、部屋代の都合から阿佐谷の六畳のアパートに同居することにした。山本君はその後、民芸品を扱う会社を設立。アジアを飛び回った経験もいかしエッセイストに。

私が厚生事務次官をやめた時、彼は「アジアの実情を自分の目で確かめておけ」と力説し、旅の案内を買って出た。夫婦二組での道中、インドネシアのスラム街で道に迷い、身の危険を感じる事態に。二人の妻を前に挟んで歩いたが、方位を感じ取る彼の動物的な勘のお蔭で切り抜けた。

私が今日までなんとかやってこられたのは山本君の直言に負うところが大きい。特に官房副長官になってからは彼は厳しい国民の代表。慣例となった千葉県での家族ぐるみの芋掘りでも車中で政策議論に花が咲いた。「財政支援なき少子化対策は無意味だ」。率直な意見は極上なこやしとなった。

副長官を退いた後、再び夫婦そろって南仏の『旧婚旅行』に出掛けた。私のひそかな願いは元気いっぱい人生を楽しみ、山本君より一日早くおさらばすること。彼のいない世の中なんて、およそ味気ないと思うからである。(ふるかわいじろう=前官房副長官)

阿佐谷の六畳一間の狭いアパートで共同生活をしてきた時代、世の中は今のよう物が溢れて豊かな時代ではなかった。単独では家賃も支ええなかったのだ。食べて行くのが精いっぱいだった。古川君は残業で帰るのが遅かった。国会があるときなど事務机の上で仮眠をとることもあるようで、帰って来ないこともあった。

私が夜遅くなるのは、ほとんど居酒屋で安酒を飲んでる時くらいだ。金がなかったので、旧文芸春秋の元専務藤沢閑二さんがよく飲み連れに連れて行ってくれた。ある時、藤沢さんが開け放しの部屋にやって来て「おい悦夫!起きろ」と布団を剥がした。そこには、私ではなく古川君が寝ていた。私が帰って来た時、藤沢閑二さんと古川君の二人はウィスキーを飲んでいた。

古川君は友達思いだった。若気の至りで喧嘩早い私が手を出しそうになると、必ず加勢してくれた。二人とも若かったが、今考えるとひやひやする思いだ。万一間違ったら、今ある彼はなかったかもしれない。私は一匹狼だからどうでもよいが、彼は組織人だ。しかも国家公務員。遅すぎたが、「悪かったな」と、今、謝れることなら謝りたい気持ちでいっぱいだ。

自由奔放に生活する私とは全く正反対に、公務員として真剣に取り組む古川君を私は見て来た。ただ目の前の仕事を全力でこなしていく。彼に偉くなろうとか出世しようとかいうような気持ちが全くないのに気づいたことが何度もある。

9月7日、桐ヶ谷斎場で火葬式が行われた。花に埋もれてゆく古川君を見ても、人

形を見ているようで、これが彼の最後の別れとはとても思えない。

彼は、心臓のペースメーカーの耐用年数は7年なので95歳で取り換えることになるが、そこまで生きられたら十分だ。オーラルヒストリー(当事者の証言をまとめた記録)も出来上がったし、公の仕事から全て離れて、これからは理津子と旅をして、温泉などにゆっくり浸かりたいと2、3日前に言っていたばかりだった。

心臓以外の病気でこの世をおさらばするなんてひどすぎる。私も彼を追って行くのが道というものであろうが、こうして未だにおめおめと生き延びている。

古川貞二郎は愛国者だった

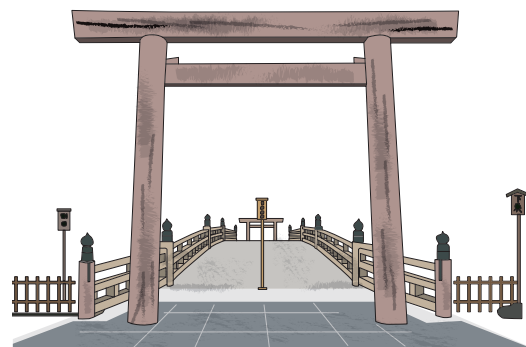
お別れの会(献花式)には、列に並んで花を奉げるつもりだったが、近親者席に座ってもらいたいと理津子さんから電話があった。嬉しかった。秋篠宮妃殿下、福田康夫、小泉純一郎、森喜朗の元首相を始め各界の著名人や友人たちの弔問客で2時間以上も途切れずに献花の列は続いた。

上皇、上皇后さまからも菊の花が届けられた。その横には旭日大綬章の勲章が飾られていた。旭日大綬章は、平成15年の栄典制度改革以前の勲一等旭日大綬章に該当し、正三位に叙されるはずだ。将に天皇陛下の臣、古川貞二郎と言ってよい。大往生だった。周りの者は大きな喪失感に打ちのめされたが、彼の人生はほぼ完結したと言ってよいのかも知れない。

彼は自分のやれることはもう無い、と公の仕事はどんどん手仕舞いしていったが、今年になって、就いた役目があった。それまでも永く伊勢神宮とは深い関係があったようだが、改めて伊勢神宮崇敬会監査役の重責を引き受けた。

一週間ほど前にオーラルヒストリーも書き終え、「俺のやり残したことはほとんどない」と何度も言っていたが、この世を去るに当たって、彼には一つだけ気掛かりなことがあったに違いない。それは将来における安定的な皇位継承問題だ。2005年11月24日、「皇室典範に関する有識者会議」で女系天皇を容認する報告書が小泉内閣に提出された。古川貞二郎君も有識者会議のメンバーの一人ではあったが、実質的には、彼が中心的な役割を果たしたのではないかと私は思っている。この「女系天皇を容認する」内容の報告書は小泉内閣に提出され、そして閣議了承された。だが、その後、安倍内閣に代わった後に棚上げされている。

時は遡るが、首席内閣参事官として勤務していた時に、昭和天皇が御崩御遊ばされ、続く大喪の礼で古川君は実務の責任者を務めた。この時、天の思召しと思うほかないが、不思議な偶然が起きた。宮内庁式部副長の職にあった友人の中島宝城君が、宮内庁側の大喪の礼の実務責任者を務めることになったのだ。中島君は冗談で古川君から時々、厳しく叱られたとぼやいていた。





古川君は、憲法上の政教分離の原則を逸脱しないように、国の行事と宗教行事の折り合いをつけるのに頭を絞って並々ならぬアイデアを次々と実現していったのだ。二人は同じ大学の法学部の同期生で親しい友人なのだが……。

私も出来の悪い同窓でもあったし、陣中見舞いを兼ねてよく官舎を訪ねた。天皇陛下が御病気に伏せられ、ご崩御遊ばされるまでの期間の古川君の心労と献身は周りの者にしか分からなかったと思う。彼は、殆ど睡眠も取っていないはずだ。その後も内閣官房副長官として幾度も国家の危機に遭遇して、危機を凌いできた。その実務経験からも危機管理については、深い見識を身につけている。国家危機の最高の専門家と言ってもよい。

古川貞二郎君は、日本国の中心となる柱は天皇制である、という思いが人一倍強い。なんとしても天皇家を絶やしてはならない。だが今の社会的風潮・傾向を考えると未来永劫に男系による天皇制を維持することは困難かも知れない。国家の危機管理の立場から皇位の安定的継承のためには今のうちに「女性天皇」を法制化しておかなければならない、と考えていたのではないかと思う。それが心残りでは彼は彼岸に渡って行った。

菊花の約

彼岸に旅立った友、古川貞二郎を想うと、江戸中期、安永5年(1776)に上方で出版された上田秋成の著書『雨月物語』、『菊花の約』の段を読み返さずにはいられない。

「菊花の約」の中に、主人公の丈部左門が、後で義兄弟となった赤穴宗右衛門と出会う場面がある。その時、宗右衛門は、やはり病、(恐らくコロナだろう)、に罹って床に臥せていて、病を恐れた人々は誰も寄り付かないという有様だった。

丈部左門は「人の命には、天の定めというものがある。だいたい疫病には一定の日数というものがある。その間を過ぎてしまえば生命に差しさわりが無い」と、付き添って甲斐甲斐しく病の介護をした。お蔭で赤穴宗右衛門は回復に至る。

二人は、離別の際、重陽の節に再び会おうという約束をした。ところが、その秋、出雲に逗留していた赤穴宗右衛門は、藩のお家騒動に巻き込まれ、出立できなくなった。宗右衛門は自害して「一日千里を往く」魂となって、重陽の節の、その日に左衛門のもとに戻り約束を果たした。

「菊花の約」には、「柳は春に芽を出し、夏には青々とした葉を茂らす、秋には葉を散らし、冬には枯れる。しかし、それでも春

になると芽を出し、葉を茂らすからまだまだ。ところが軽薄な人は一度去ったら二度と戻ってこない」と、いう一節もある。古川貞二郎はこの言葉とは全く逆、情の厚い男だった。

彼は、佐賀鍋島藩の「葉隠四誓願」を終生、実践し、己の美学を全うして去って行った。私が先に逝くと思っていたのに、どうしてこういう事になったのか。

10月22日、佐賀の菩提寺で行われた本葬に参列した。今から60年前、私たちが初めて社会に出た時代、東京から佐賀までは、24時間、一昼夜かかった。21世紀になってすべては変わった。空を飛ぶ矢より早く目的地に着くことが出来るようになった。私は、東京を朝発って、昼前には九州に着き、長い列に連なり友の霊前に焼香した。

古川貞二郎さんと ブナの森新聞

古川貞二郎さんは山形の個人媒体である「ブナの森新聞」に何度も寄稿して下さり、とても光栄なことでした。薬局の地域活動として地道に続けている点を評価して下さったと思います。また、電話をいただくたびにほぼ毎回、「あなたはいい仕事をしているねえ」と声をかけて下さいました。新聞の内容に関しても一定の評価をいただけていると考えうれしかったです。

接点があったのは、私が業界紙の記者として厚生省(現在は厚生労働省)の記者クラブ「厚生日比谷クラブ」に出入りしていた時です。平成4年に古川さんが保険局長に就任された際に局長室で行われた就任会見に日比谷クラブの一員として末席を汚したことがありました。名刺交換はさせていただきましたが、古川さんが私をおぼえていらっしゃるはずありません。

私は業界紙の記者を退職後、山形で薬剤師として働き、平成29年暮れから新聞発行を始めました。数年が経ち、政治の世界では官邸主導政治が続いていましたので、政治家と官僚の関係はどうあるべきか、官房副長官を長く務められた古川さんに書いていただけないものか、手紙と過去の新聞を郵送させていただきました。

可能性は低いと考えていましたが、すぐに古川さんから電話をいただき、原稿を書いてもいいですよと、ただ、今の政権のことは書けないので自分が経験した当時のことならば、ということで原稿を書かせていただきました。(令和3年春号・夏号「総理官邸と政官のありかた(前編・後編)」)

その後も「いつでも穴埋めの原稿をかきますから」と、優しい言葉をかけていただきましたが、そこまで調子にのるわけにもいきません。数年したらまたお願いしてみようと考えていました。

今年(令和4年)はじめに、電話をいただきお話をさせていただいた時、「ぼくの書くものは固い内容になってしまうけど、それでよければ書きますよ」とおっしゃって下さいました。このようなテーマでとお願いさせていただくと、しばらくして「この内容で読者の人は興味を持つかなあ?遠慮なく言っ

てください」とやりとりをさせていただきました。

そして3回シリーズの「未来の日本にのこしたいこと」を書いていただくことになりました(令和4年春号「沖縄問題を振り返る」、令和4年夏号「私に関わった印象深い社会保障制度改正」)。第3回の原稿はこの令和4年冬号に掲載させていただく予定でした。奥様の理津子さんによると冬号に原稿を書くことを楽しみにされていた、とのことでした。どんな内容になったのでしょうか。

夏号を発行してもなく、保健所からの紹介で沖縄の女子高生が、引率の先生といっしょに新型コロナウイルスの抗原検査と検査キットを購入するため薬局にいらっしやいました。沖縄の方とうかがってましたので、受付の時に、よい機会だと考えブナの森新聞をお渡ししました。15分ほどで結果がでて女子高生に声をかけたところ、それが聞こえないほど貞二郎さんの沖縄の記事を読むのに没頭してました。

令和3年に原稿を郵送で送っていた際には、電話もいただき、お話をさせていただいた内容を原稿にとりこんで書き直されたものをメールで送りなおしていただきました。その時のメールには、自分メールをやらないので妻のパソコンからの送信です、という文章がそえられていました。

その後奥様の理津さんと時々メールでやりとりをさせていただいています。貞二郎さんは以前から理津さんに「お前より先に死にたい」と話されていたそうです。ですが、あまりにも突然のことでした。

理津さんが救急車を呼んだあと、貞二郎さんはお気に入りのワイシャツを着て、しっかりジャケットも羽織られたそうです。そこまですなくても、と声をかけると「これでいい」と答えられたそうで、理津さんは武士が掛かけていく姿を見るようだったと振り返られています。

病室前で交わされた「新聞ある?」「新聞は持ってこなかった」



「古川貞二郎さんと理津子さん
京都 永観堂にて 2018年11月16日」

が最後の会話だったといえます。

頑張っってね、と声をかけ理津さんはいったんご自宅に戻り、翌日持っていく着替えなどの準備を済ませてから休もうかと考えていると、午前2時過ぎに病院から急変の連絡、すぐにタクシーで駆けつけたものの、最期には立ち会えなかったそうです。明け方にはニュースが流れてしまったためにあわただしい中でのお別れになってしまったようです。

官房副長官をおつとめの頃はいつでも総理官邸にかけつけられる体制をとられていたはずですので、当時のお休みについて今回改めて理津さんにうかがってみました。宿泊をとまうようなお二人一緒の旅行は数回しか行った記憶がないということです。5月の大型連休時には多少休みをとることができたそうで、千葉の畑に行き、サツマイモやピーナツ、夏野菜などの植え付け作業をお二人と一緒にすることを楽しみにされていたということです。

貞二郎さんはそうした休みがないことも、自分は責任のある立場にあるので当然のことと考えていたのでは、と話されます。一方理津さんご自身は、ご姉妹やお母さまと一緒に外国へ旅行に行かれるのをうらやましく思ったこともあったといえます。しかし、「主人の毎日をサポートするのが私の役目と思っていましたから、一緒に働いている気分でした」と振り返っておられます。

この夏のご夫婦のほほえましいやり取りです。今年から貞二郎さんの晩酌に理津さんもコップ一杯だけつきあうことになり、ある暑い日に枝豆をおつまみに理津さんがごくごくビールを飲みほすと、貞二郎さんが「おいしそうに飲むねえ」と感心されたそうです。

ゆっくりお休みください。
古川貞二郎さんのご冥福をお祈りいたします。

ブナの森新聞 鈴木 康久

二年半ぶりの帰郷に思う

～つむぎまのここと思い出す桜かな～

古川 貞二郎

東京佐賀県人会誌「東京と佐賀」令和4年夏号より。許可をいただきましたので転載します。

五月初旬のある朝、高校の先輩で畏友の橋本謙治さんから突然お電話をいただいた。

「何事だろうと思ったら『東京と佐賀』に一文を書いて欲しいとのこと。先輩の頼みには逆らえないとお受けし、母校九州大学の入学式に出席した機会に久方ぶりに佐賀に帰ったので、このたびの帰郷をとり上げることにした。

四月の初め、二年半ぶりに帰郷した。昭和三五年（一九六〇年）一月東京にできて六二年になるが、こんなに長い間帰らなかったのは初めてである。

それまでは総理官邸勤務など特別な時期を除いて少なくとも年に二度は帰佐していたと記憶している。メモ用の日誌で確認したら、令和元年（二〇一九年）一月二日に開催された佐賀県主催の島義勇（プナの森注：佐賀藩士）銅像建立一周年記念祭に出席するため佐賀に帰ったのが最後である。

上気の中、青空の下で挙行された記念式典に出席し、植樹の行事にも参加させていただいた。泊りは、いつものように実家同然にしている佐賀市大和町の妹今泉ヒサ宅である。

あれからほぼ二年あまり、新型コロナウイルスの感染拡大で万々迷惑をかけることになってはと考えると、佐賀行きを遠慮していた。それが昨年の暮、九州大学の石橋総長から四月五日の入学式にぜひ来賓として出席し挨拶して欲しい旨の依頼を受けた。

コロナの感染拡大が続いていけばビデオメッセージでお願いするが、できれば出かけてきて新入生に直接語りかけて欲しいとのこと。私も折角なら新入生の前で話をしたいと思った。幸いなことにコロナ感染も大事に至らず出席が可能になった。そうと決まれば入学式の後佐賀にも足をのばし、先祖の墓参りに行ってこようと考えた。

現役に近い社会活動をしている私に対し、長年積み重ねてきた経験の中で私に最も大事だと思うものを新入生の皆さんに伝えて欲しいというものであったと考える。

そこで私は、伝えたいものがたくさんある中から絞りに絞って三つの大きなことを伝えることにした。

第一は、拠って立つ原点を持つこと、つまり自分の拠り所となるものを持つことの大切さである。私の原点は、「逃げない 諦めない 道は開ける」というものである。

これは私が散々苦労して厚生省（現厚生労働省）に入った折の厳しい経験から得た私の信条といふべきものである。今日振り返ってみると、結局、この信条がずっと私の長い人生を支えてきたことは間違いない。

第二に大切なことは、世の中のことに関心を持ち、少しでも疑問に思うことがあったら自分自身の頭で何故そうなのかを考える習慣をできるだけ早く身につけることである。

新型コロナウィルスが世界を席巻、ロシアによるウクライナ侵攻により国際社会の平和が深刻な危機に直面し、また、先端科学技術などの進歩により社会の仕組みが大きく変わっていく今日、このような混乱と変化の時代には、特に各種の事象に強い関心を持ち、自分自身の頭で考えることが大切である。そうでなければ、時代の変化についていけない。

第三は、プラス思考の大切さである。人生は山あり谷ありと言われるが、誰でも得意の時もあれば失意の時もある。

私は高校時代、市場出しをしていて当時貴重な自転車を買ったことがあった。申訳なくとうなだれる私に向かって、母は「自転車を買ったくらいで怪我をしなくて良かった」と言い、また、怪我したときは「この程度の怪我で済んで良かった」と言ってくれた。

小淵総理は国会演説で、コップ半分の水を「まだ半分ある、もう半分しかない。どう考えるか」と国民に問いかけ、「まだ半分ある。元気をだそうよ」と

励ました。

私は困難に遭遇した時、厚い雲の上にも青空が広がっていることを信じ、プラス思考で何とか切り抜けてきた。

要はどんな時もプラス思考で前向きに考えることが大切である。私は壇上から約二〇〇〇人の新入生に事例を挙げて語りかけながら、気持ちには学生一人一人に真剣に向きあっているように感じていた。

東京に帰ってから石橋総長から直筆のお手紙をいただき、また、事務を担当してくれた女子職員からもメールをもらった。

メールには「学生同様、私も前のめりになってお話を聴き感銘しました」というようなことが記されていた。半ば以上お世辞にしても、私にとってはとても嬉しいことだった。

私の言葉は今はまだ人生経験の少ない新入生の耳にはなかなか届きにくいかもしれないが、将来、仕事で苦労した折など「あの時、古川先輩が伝えたかったことはこういうことだったのか」と何人かはきつと気付いてくれるものと信じている。

何とか二回に及ぶ式典を終え、石橋総長などに見送られて椎木講堂を後にし、福岡空港までタクシーで行き、そこから高速バスで妹宅に向かった。

少し遅めの夕食のテーブルには、山菜など私の好物をよく知っている妹のおいしい手料理が並んでいて嬉しかった。

翌六日朝、上気の中を妹の長男の寛君の車で妹たちとお墓参りに出かけた。道順を考え、まず大和町北原にある常立寺を訪ねた。ここには、義兄夫婦が眠っている。

義兄は私の従兄にあたるが、古川家に子どもが生まれないため養子にきて、その後義姉の家に婿養子に入っている。義姉は、私が新制春日中学時代の音楽の教師で、今から約一年前、九五歳で亡くなっている。

義兄は、私が東京を離れられない官房副長官時代に亡くなったたり、義姉は

コロナ禍の中で亡くなったため、私はいずれの葬儀にも出席していない。

このたびようやく墓参りができ、やっと肩の荷が下りた気がした。なお義兄夫婦のことは、先年、文芸春秋企画出版部から出した拙著「鎮魂ハルの生涯」に詳しく記している。

常立寺の次は、佐賀市内金立町千布にある浄円寺。ここには妹のつれ合いの今泉正巳さんが眠っている。佐賀農芸高校（現高志館高校）の校長を務めた農業の専門家だ。私の千葉大網の畑の甘藷の苗は、正巳さんが自宅の庭の一角に苗床をつくり育てた苗だった。その苗は、大網の畑で立派な甘藷となった。

私が副長官の頃は、大網で獲れた甘藷をたくさん総理官邸に持参し、官邸の厨房で焼き芋にもらった。

女子職員を中心に官邸の職員たちが「おいしい、おいしい」と言っていて食べたよ」とお礼を言われた。

また午後一〇時頃から自宅で行っていた古川番の記者さんたちとの懇談では、焼き芋は大変好評だった。くず芋ばかりになったら、妻が刻んで油で揚げ、胡麻をまぶして大学芋にして出してくれた。お腹の空いた若い記者さんたちは、とても喜んでくれた。今でも会えば話題になる。

浄円寺には、前任職の田代祐照先生も眠っておられる。副長官を辞めて間もない頃、中学生による大和町未来会議に招かれ、話をしたり、中学生たちと昼食をとりながらの懇談会にもでた。未来会議の主宰者の一人が田代先生で、以来親しくしていたが、残念なことに先年旅立たれた。

久方ぶりにお会いした奥様と先生の思い出を語り、境内にそびえたつ樹齢何百年の大銀杏を見上げ、生前大銀杏の由来を熱心に説明して下さった故人を偲んだ。

また偶然のことだが、浄円寺の今泉家の隣は私が生まれ育った同じ集落の小林家の墓で、ここに美代子さんが眠っている。「鎮魂ハルの生涯」に書いた幼友だちのみほちゃんである。

墓碑をみると、昭和二年（一九三三年）七月三日に短い生涯を閉じている。享年三歳。私が生後一年十か月の時にあたる。ほとんど記憶に残っていないものの、母から「いつも二人で仲良く遊んでいた」と聞いていたせい、不思議ななつかしさを覚えた。

最後に菩提寺である市内兵庫町下洲の妙常寺にお参りした。二年半ぶりの墓参りとあって、心の中で詫言ながら妹たちとみんなで心をこめて掃除をし、墓碑に水をかけ、妹宅の庭に咲いていた色とりどりの美しい花を飾った。

線香の良い匂いが漂っていたせいか、清々しい気分を満たされているのを感じた。元気に寺のまわりの草とりをしておられた住職にも、久しぶりにお目にかかることができた。

妙常寺のあと、寛君が昼食に佐賀駅近くのグランデはぐくれの名物になっているシリアンライスをご馳走すると言うのでみんなで出かけた。

初めて食したが、なかなかの味だ。佐賀らしく新鮮な野菜がいっぱい盛りだくさんで、少しおしゃべり。健康にも良さそうだ。心にかかっていた三つのお墓参りをすべて済ませたことも料理のおいしさで無縁でないような気がした。

グランデはぐくれを出るとき、支配人の方が「もしや古川さんでは？」と声をかけて下さった。私のことをよく知っていると言われる。佐賀を出て六二年、旧知でもない方に声をかけられて今も自分が佐賀にしっかりとつながっているような気がして素直に嬉しく思った。

かくして私の二年半ぶりの帰郷の旅は、上々の首尾で終わった。芭蕉の句に「さまざまのここと思い出す桜かな」というのがある。私のこのたびの帰郷は桜の季節を少し過ぎていたが、亡き人たちを含めて多くの人々と向き合い、さまざまのこことを振り返るとてもいい旅だったように思う。あらためて、感謝の念を深くしている頃である。

元内閣官房副長官 佐賀市大和町出身



強力な野党勢力結集を!!

「被害者救済法」で幕引きか?

2022年の日本の重大ニュースは、日本政界に君臨した安倍晋三元首相が参院選の演説中に銃撃され急逝したことを機に、自民党と旧統一教会の長年にわたる癒着が白日の下にさらされたことだろう。岸田内閣の支持率を続落させる起点となったこの問題を、自民党は年末の「被害者救済法」成立で幕引きしようとしている。

どう見ても骨抜きの内容

この法律は「ないよりマシという程度」のもの。これで救済の幅が広がったとは到底言えない(全国霊感商法対策弁護士連絡会・山口広弁護士)というシロモノだった。救済されるのは法律の施行後に悪質な寄付勧誘などで被害にあった人に限られる。これまで旧統一教会の被害にあった人は「対象外」なのだ。これで「被害者救済法」と呼べるのか。骨抜き法案というほかない。

野党との連携を模索する岸田首相

自民党でもとりわけ旧統一教会と濃密な関係を続けてきた最大派閥・清和会(安倍派)や、創価学会への波及を恐れる連立与党の公明党は、当初から「被害者救済法」に及び腰だった。しかしこの問題を放置したら世論の批判は収まらない。岸田首相は立憲民主党と水面下で連携して法案づくりを進め、清和会と公明党を押さえ込もうとした。そこで自民、公明、立憲、維新4党の実務者協議を立ち上げたのである。

財務省も暗躍

これに便乗したのが財務省だった。安倍・菅政権で冷遇された財務省は、池田勇人、大平正芳、宮澤喜一ら大蔵OBの首相を輩出してきた宏池会(岸田派)政権が約30年ぶりに誕生して歓喜に包まれた。しかも安倍氏急逝で自民党のキングメーカーに躍り出た麻生太郎副総裁は財務相を9年近く務めた財務省の後見人だ。

消費税を上げるチャンスだ

一方の立憲は21年夏の参院選に惨敗し、岡田克也幹事長-安住淳国会対策委員長の緊縮財政派重鎮が復権して党運営を掌握。民主党政権末期の2012年、当時の野田佳彦首相(現・立憲最高顧問)と自民党の谷垣禎一総裁(宏池会を源流とする谷垣グループ)が財務省の仲介で消費税増税を合意して以来、与野党合意で消費税増税を決める千載一遇の好機が再来したのである。

まさかの大連立か?

ミスター消費税と呼ばれる野田元首相は岸田首相が世論の反対を振り切って実施した安倍国葬に参列し、安倍追悼の国会演説も引き受け、宏池会と立憲の連携機運は高まった。野田元首相を首班に担いで消費税増税を進める大連立構想まで浮上したのである。

ちょっと待て! そうはさせないぞ。

宏池会と立憲の急接近に警戒感を強めたのは清和会と公明党だった。これ

に非主流派に転落していた菅義偉前首相や二階俊博元幹事長が加わり「岸田包囲網」が瞬く間に広がった。麻生派・岸田派の3閣僚にスキャンダルや失言問題が浮上すると与党内からも更迭論が噴出し、岸田内閣は閣僚辞任ドミノに追い込まれた。

ポスト岸田の座は手放さないと茂木幹事長は「立憲外し」を仕掛ける

ポスト岸田を狙う茂木敏充幹事長も宏池会と立憲の急接近に危機感を抱いた。大連立構想が進むと自分は首相の座から遠のく。茂木氏は自公立維の4党協議を露骨に軽視し、立憲と袂を分かった国民民主党を引き込んで自公国3党協議を別に立ち上げ、「立憲外し」を仕掛けた。維新執行部と会談して立憲との分断を図った。

あっさり白旗を上げた岸田首相

岸田首相はあっさり白旗をあげた。麻生氏、茂木氏、菅氏ら実力者と次々に会談し、立憲との連携は棚上げして党内融和を優先する考えを伝え、政権延命への協力を求めたのである。ここからの岸田首相は「ベタ折れ」だった。清和会が主張していた原発推進や防衛費増額、敵基地攻撃能力(反撃能力)保有を次々に容認。財務省が想定していた25兆円の補正予算も清和会の意向を受け入れて29兆円に増額した。

政局を優先した泉立憲民主党代表

被害者救済法案も骨抜きとなった。維新や国民は岸田首相が党内融和に傾いたとみるや、立憲に先駆けて「骨抜き法案」への賛成を表明。立憲は「政局よりも被害者救済を優先する」(泉健太代表)と強気の姿勢を示していたにもかかわらず、最後は「維新と賛否が割れて国会での共闘が崩れるわけにはいかない。与野党協議の枠外に追い出されるのも困る」という政局判断を優先し、「骨抜き」を承知で賛成に転じたのである。

結果的に「誰も救わない」被害者救済法が成立

この結果「誰も救わない法律」と酷評された被害者救済法案は、自民、公明、立憲、維新、国民5党の圧倒的多数の賛成で可決・成立した。5党の衆院議席保有率は95%に達する。被害者弁護団が「実効性がない」と批判し、世論も厳しい目を向ける法案が、国会最終盤に衆参あわせて5日審議しただけで、ほぼ「満場一致」で成立してしまったのだ。

これでは5党談合政治だ

自民がまずは維新と国民を引き込み、

立憲が取り残されたくないとはばかりに後を追う。被害者救済法の成立過程は、野党が与党になし崩し的に譲歩を重ねてすり寄っていく「5党談合政治」の出現を物語る。

野党なしの大政翼賛体制に向かうのか?

立憲は維新を「自公の補完勢力」と批判してきたが、今や立憲自身も「自公の補完勢力」に加わってしまったのだ。立憲国3党は「野党」と「与党」の中間に位置する「ゆ党」と呼んだほうが適切だろう。国会が与党一色に染まる「大政翼賛体制」の足音が着実に迫っている。

敵基地攻撃能力の保有→賛成に傾く

この流れが加速する予兆はすでに現れている。維新が敵基地攻撃能力の保有に賛成したことを受けて立憲の外交・安保戦略プロジェクトチームの会長を務める玄葉光一郎元外相は賛成の方向でまとめる意欲を示した。

原発新增設・運転期間延長→賛成論広がる

維新が支持する原発新增設や運転期間延長についても立憲内では賛成論が広がり始めた。憲法の専守防衛を逸脱する敵基地攻撃能力の保有も、福島第一原発事故を反省して掲げた脱原発を否定する原発推進政策も、立憲民主党の結党理念を否定する重大決断だ。

立憲民主党は憲法も民主主義もすててしまうのか?

立憲は「維新との共闘は崩せない」「与野党教護の枠組みから外されたくない」という政局判断を優先し、日本の民主主義の行方を左右するルビコン川を渡ろうとしている。

岸田首相の配慮もあり攻勢をかけた立憲だったが

立憲は22年秋～冬の臨時国会で、旧統一教会との癒着が発覚した山際大志郎氏ら閣僚に加え、差別発言を繰り返してきた杉田水脈・総務政務官らを国会で激しく追及した。岸田首相は立憲との連携を重視し、3閣僚の更迭に応じるなど配慮をみせてきた。

一転党内融和に舵をきられてなすすべなし

しかし被害者救済法の成立で局面は一変した。岸田首相は自民党内の融和路線に転じ、茂木氏ら自民党執行部は維新や国民を最初に引き込んで立憲を後から追従させる「5党談合政治」の仕組みに味を占めた。立憲はいまのところそれに抗うすべがない。



大政翼賛政治のはじまりか?

足元をみられ公明党も 維新も譲歩を重ねることに

公明党も維新や国民に連立パートナーの座を奪われることを恐れて自民党に譲歩を重ねていこう。防衛費増額や敵基地攻撃能力の保有を早々に容認したのはその前兆だ。

自民党に屈服した岸田首相 +野党分断工作に陥落した立憲 =制御不能な政治状況

岸田首相は自民党に屈服し、立憲は自民党の野党分断工作に陥落した。清和会をはじめ自民党内の諸勢力がそれぞれ身勝手な主張を声高に掲げ、政界全体がそれに引きずられていく、何と

も怪しげな制御不能の政治状況が出現したのである。防衛費の財源確保をめぐって岸田首相が打ち出した増税方針にも、自民党内ばかりか閣内からも公然と異論が噴出している。

1日でも長く 首相のいすに座っていたい

岸田首相に自民党を抑え込む力はない。さりとて衆院解散・総選挙を断行し、求心力を取り戻す胆力を持ち合せているようにも見えない。岸田首相は23年5月に地元・広島で開催するG7サミットの議長役に並々ならぬ意欲を示している。1日でも長く首相の座に居座るために自民党内の声を丸呑みしていく——情けない政権がダラダラ続く雲行きだ。

大政翼賛体制にあらがう 強力な野党勢力の結集を

人口減、高齢化、過疎化、物価高、

経済格差…国民生活を揺るがす諸課題は山積している。機能不全の5党談合政治に白紙委任している余裕はない。大政翼賛体制に抗う強力な野党勢力の結集が望まれる。

SAMEJIMA TIMES

ジャーナリスト 鮫島 浩

49歳の時、朝日新聞を退社し個人メディア「SAMEJIMA TIMES」を開設。現在YouTubeやウェブサイト上でわかりやすい政治・政局解説、マスコミ批判を発信中。2022年5月に発刊した『朝日新聞政治部』（講談社）は4.8万部を突破。



遠のく政権交代

おかあさん、 頑張って

自分育て



私の主人は、建設系の仕事をしていて、全国各地を飛び回っています。家にいないことが多く、子供たちにとっても「パパ」がいないことの方が日常になりつつあります。

小学3年生の長男は、精神年齢はおそらく、3歳。かまってちゃんでごめん坊。今でも私の膝の上に乗ってくる、可愛いヤツです。おしゃべりで、学校であったことは聞かなくても教えてくれるし、悩みがあってもためておけないタイプです。打たれ弱くて、凹んだらなかなか浮上できないところが玉にキズ。「男の子なんだから、強くなりなさい」といろんな人から言われちゃってます。

そんな長男に対して、小学5年生の長女は、こちらからしたらさみしく感じるくらいのおっけなさ。でもたまーに甘えてくるところが愛おしい、ツンとデレのツンが多めの難しいお年頃の女の子です。学校のこと、友達のこと、なにか困っていることがないか、悩み事はないか聞いても、返事は決まって「大丈夫!」のみ。自分のことは話さずのためこんでし

まうタイプです。

そんな長女とはゆっくりと1対1で話す時間を作っています。たわいもない話から、学校の話、好きなアイドルの話まで、いろんな話をします。長女は、言葉にするよりも文章で表現する方が得意。それじゃあと私と長女、2人きりの交換ノートも最近はじめました。私よりも長女の方が文章力があるかもしれません。いずれブナの森新聞でみなさんにおめにかかるかも。(注:「小・中学生にも理解できる?お薬、病気、障がいのおきそちしき」というコーナーでは、小学2年生のときからフリガナをつけた方がよい漢字やわかりにくい表現、文章のチェックを担当してもらっています。おそらく彼女の成長にあわせて、フリガナをつける漢字の基準が変化しているのではと思います)

12月の初めに、関東方面に出張していた主人が帰ってきました。約2か月ぶりに帰ってきた主人は、私と子供たちの様子を見て、感じたことがあったようで私に言ってきました。「長男に手をかけすぎてるんじゃないか。長男をかまっている間、長女がさみしそうな顔をしていた。」

私自身も長女で、3歳年下の弟がいます。私は物心がついた時にはすでに、母は弟のモノだと思い、遠慮して甘えることを我慢していました。母の愛情を感じていなかったわけはありませんが、さみしかった記憶が残っています。

そんな自分の経験もあり、私は長男を出産したとき、長女のこと、

長男のことも対等に愛し、想いを伝えていこうと決めていました。何でもしたがるようになっていた、当時2歳10か月だった長女には、「ちびママちゃん」になってもらい、一緒に長男のお世話をしてもらったのです。

それが長女を、同じ年齢の子よりも大人びた子にさせてしまった原因かなと反省していますが、長女には、長男と同じくらい大好きで、お母さんにとってふたりとも大事な存在なんでしょう。そして、それは今も同じです。

2人とも性格がまったく違います。先に書いたように、本当に違うのでそれぞれに合った接し方をしているつもりでした。でも主人はそう感じたとのこと。正直ショックでした。確かに、長男と関わっているとき、長女がどんな顔をしているか見ていなかったと思います。長女もかまって欲しかったのかな。どちらかに関わっているときこそ、どちらも意識してあげないといけないなと反省しました。

主人の言葉で気が付いて、見直すことができました。時々、主人がいてくれて、関わってくれたら良いのになあと思うときはあります。例えば、子供たちを叱ったときです。叱ってもフォローしてくれる人がいません。なので時間差をつけて自分でフォローしています。私自身も冷静になる時間を作って、子供たちは反省する時間を作って、少し経ってから一緒に反省会をする感じです。

でもこれでは私の思っていること

を押し付けているだけなのではないかと思うときもあります。私だけではどうしようもできないときは、主人にメールで相談します。主人はテレビ電話で子供たちと話してくれます。成長過程の大事な時期に、子供たちといられないことを悔やむときもあるそうです。そんなこともあって、あの言葉だったのかなとも思います。

長女は来年小学6年生。再来年には中学生。さらには高校生と、その時々でいろいろ悩むと思います。長男も同じです。そんな時に、真っ先に相談してもらえたい存在でいたいと思います。いつも心は2人の傍にあるんだよということ、これからも伝えていきたいと思っています。

子育ては難しいですね。何が正解かわかりません。とことん悩むので、頭の中から悩み事がなくなることはありません。でも、子供たちの心が少しでも軽くなったり、良い方向に導ければそれで良いと思っています。あの時は、普段家にいないくせに!!と少し夫にイラっとしました。でも周りの意見もよく聞かなくちゃと思います。子育てを通じて「自分育て」も頑張ります。

ブナの森調剤薬局
須貝 恵



エッセイ



甘いくすり、 苦いくすり

目の前の事実を受け入れること

〈石黒由紀子 (いしぐろ ゆきこ)〉
エッセイスト。栃木県生まれ。日々の徒然、犬や猫との暮らしを中心に執筆。「犬のしっぽ、猫のひげ」に続き「楽しかったね、ありがとう」(ともに幻冬舎)が文庫になりました。

私は17歳になる老犬と暮らしています。名前はセンパイ、豆柴のメス。人間年齢で80代後半。生後4ヶ月で我が家の犬となり、かわいかった子犬はかわいいままおばあちゃんになりました。後ろ足が立たず、歩けないので眠っているとき以外は犬用の車椅子に乗って過ごしています。食餌も排泄もひとりではできず、車椅子で家具などにぶつかりどこかにハマってしまうと動けない。救助が必要となるので、家を留守にすることもできません。

少し前のこと。我が家に遊びに来てくれた知人から、後日こんなメールが届きました。「センパイちゃんが年をとり、かわいそうで見ているのがつらかったです」。そして「あんなに若くて元気だったのに、そう思うと老化がショックでした」。その人に悪気など微塵もなく、やさしさからの言葉だと

分かっていましたが、なんだか違和感が残りました。

「かわいそう」と言われると、日々の世話しけないことをしているような気持ちになりました。「かわいそう」、よく口にしてしまいますが、上からの目線で言われているような気持ちになるのは私だけでしょうか。慎重に使った方がよい言葉だと再認識しました。

犬は人間の約4倍の速さで年を取ります。やんちゃな子犬から1年ほどでピカッとした成犬になり、やがて落ち着き、同世代感が滲むようになって気がつけば飼い主の年齢をはるかに追い越して。そして、その老い方を示し、学ばせてくれます(← イマココ。我が家の場合)。

一般的に「老いる」ということを後ろ向きに捉える傾向がありますよね。私は我が家のセンパイを見ていて、老いるとは「ただ目の前の事実を受け入れること」なのだ気がつきました。老化は犬なりにも戸惑うことがあるでしょう、でも「目が見えない」ただそれだけのこと。「歩けない」ただそれだけのこと。

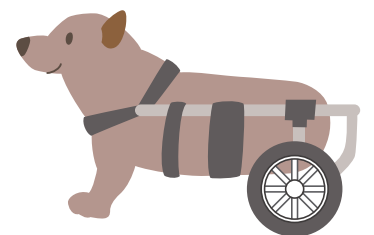
できなくなったことを嘆かず、まだできることを淡々と続ける。そして生きることしか考えない。犬とはそういう生きものなのです。こんなに潔く一生懸命生きている犬をかわいそうとは思わない。

動物と暮らすということは「楽しい」「かわいい」ばかりではありません。老いを学ぶことでもあります。月日が経てば年を取り病気にもなる。世話することも増える。そのことをちゃんと知り、覚悟した上で飼いはじめれば「年をとったから」「病気になったから」そんな理由で遺棄することも減るはずで

そういえば、12月の末に施設に入っている89歳になる父とビデオ面会をしました。決められた時間は15分。おしまい「じゃあまたね。お父さん、今年もありがとう！」と言うと、父は「お前に何にもしてやれていないのに、

なんでありがとうなんだ？」と聞いてきました。少しへそ曲がりの父らしい返しに笑ってしまいましたが、「生きていてくれたからありがとうだよ。来年も生きていてね！」と私。とっさに出た言葉でしたが言えてよかったです。父の若かった頃の姿を思い出すことはありますが、老いた父の現在の姿を「見るのが辛い」とは思わない。父にも、そしてセンパイにも寿命がある限り生きていてほしいな。

ツイッターで、あるつづやきを見つけました「16歳の愛犬のペースでゆっくり散歩をさせていたら、通りすがりの人に、うちの犬は9歳だけどこんなになっちゃうんだ、かわいそうと言われた。かわいいけれどかわいそうじゃないよ！」そう、犬も人も年を取るのは自然なこと、かわいそうではない。介護をすることが大変に思うことがあります。弱っていくのちと向き合う日々は切なくもありますが、その分愛おしさは積もります。動物も人も、若さが消えてからが生きる本番かもしれないですね。



微笑みの国からサワディーカ!

齋藤由利子 プロフィール

バンコク在住28年目の山形の嫁。自宅で料理教室Y's Kitchen主催。どこを手抜きしたのかわからない手抜き料理が得意。山形で初めて食べた筋子のおむすびが大好きで芋煮は山形県人より沢山作っていると自負している。愛称はマダミー。

33年ぶりの子育て

私、33年ぶりに子育てしています。えっ?なんて驚かないでね。末っ子が去年ママになったけど お仕事は続けたいというので孫娘のお世話。この一年間の成長は本当に著しかった。

笑うようになった。自分で哺乳瓶持てるようになった。寝返り打った。歯が生えてる。ハイハイしてるね。伝い歩きも…。毎日新しい発見があってあつという間の楽しい毎日だった。

でもね、私も一男二女育てたけど、どういう風に育てて来たか記憶に無いの。初めての経験ばかりで子育てを楽しむ余裕なんて無かったのね。きっと。その点孫守りはうんと甘やかして可愛がるだけで務まるんだから。性格の悪い子に育ったって、お勉強ができない子になったって「それは親の問題でしょ?」と言える逃げ道があるもん。孫守りで私が気をつけているのは一つだけ…。不注意から怪我をさせないっ

てことかな? 1才過ぎてあんよし出すようになったら大変よ。テレビのリモコンや引き出しの取っ手に興味深々。一番危ないのがコンセントの穴に指を突っ込もうとする事。私の長男は1才のお誕生日ちょっと過ぎた頃、節分の鬼のお面が怖くて大泣きした。それならと鬼のイラストたくさん描いて触ってはいけないところにペタペタ貼ったら効果的面だったなあ。孫は先日のおハロウィンの怖いおじさんのお面に大泣きだったからイラストたくさん描いてソケットに貼ろうかしら?

私が孫守りで大切にしているのは種類豊富な離乳食を用意する事。今ではレトルトや瓶詰めの市販の離乳食品もいろいろあって便利だけど経済的ではないし、何より犬や猫のご飯のように感じちゃうのよ。

古稀すぎて三十年ぶりに再開す
塩っけなしの離乳食作り
由利子

大人が食べる食事から少しずつよけて柔らかくしたり細かくしたり味を薄めたりしている。孫が好きなのはほうれん草のグラタン、鰻トロ丼、牛蒡のお漬物、芋煮の里芋とささがき牛蒡。一口でべえしたのはもずくと納豆。でも納豆汁のお汁は飲んだわね。「あんまりグルメに育てられても…」とレンチンとお湯を注ぐくらいしか出来ない娘は言うけど「コンビニのご飯がママの味」なんて言われたら悲しくない?

タイで孫守りしていて気づいたことがあるわ。

気候が子育てに向いていることね。日本の冬のような寒さは皆無だからいつも薄着でよし。汚れたお洋服だって洗えばすぐ乾くしね。

ほとんどのタイ人が子供好き。レストランなんかでも手の空いた従業員が必ず子供の相手をしてくれる。きっと田舎のお母さんに子供を預けてバンコクに働きに来ている人が多いからね。そして何より情報に振り回されることがない。

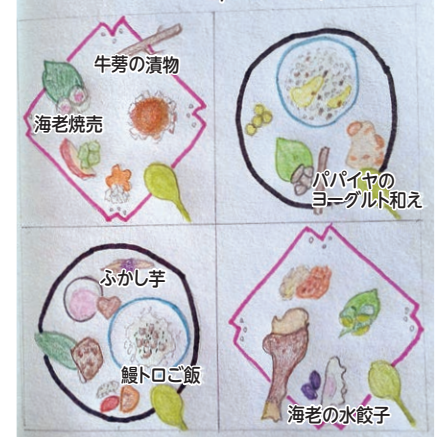
母乳で育てるのが一番とか、まだオムツ外れないのとか周りからあれこれ言われることがない。バンコクの若い

駐在ママさんたちはご主人の浮気に悩むことはあっても子育てで悩むことはないと思うな。日本人会主催の子育て相談クラスやママと一緒にのお楽しみクラスなんかもちろんあるしね。

さあ、お昼寝から覚めたらプールで遊ぼうね。孫はプールの淵に座ってバチャバチャするのが好きだけど、ジャポーンと落ちないように中腰で孫の腰回りに手を回している。結構腰に来て大変なのよ。「水着着一緒にプール入ったら?」と娘は言うけど、今更水着姿なんてね。一昨日ネットでポチッとしたアームリングの浮き輪が早く届きますように…。

孫の食事

by おばあちゃん



医薬品の安定供給とは？(下)

お薬の手に入りにくさは、このまま年を越しても続きそうです。そして、あと何回、年をまたぐことになるのでしょうか。安定供給が再開されたお薬もあります。しかし、夏以来のかぜ薬のように十分な量が供給されない状態がずっと続いているお薬、あらたに供給が途絶えるお薬があります。供給が不安定な状態を雲にたとえてみましょう。雲は形を変えながらゆっくり空を移動しています。お薬の世界では雲がないのがあたりまえなのに、空に雲があることに慣れてしまって誰も違和感をもちません。分厚い雲の中心には製薬会社さんの品質保証に向き合う弱さが垣間見られます。

GMPは最低限守らなければならない

製薬会社が工場でお薬をつくる際に守らなければならないルールがあります。それはGMP (Good Manufacturing Practice/ 医薬品の製造管理及び品質管理の基準) とよばれているものです。薬機法という法律で決められています。工場に原料を搬入する時点から、お薬の製造、出荷までのいかなる工程・作業でも、人の勘やさじ加減で行われたいよう、また機械や設備が設計・設定どおりに動くことを担保するためのものです。品質保証を、お薬の効きめの約束を含む品質と、出荷後の副作用対策を含む安定供給とにわけると、GMPは品質の中核となる仕組みです。

GMPを守った工場でも何でもつくれるわけではない

GMPを守っていることなどが確認されると製造販売承認が得られ、工場での製造が開始されます。しかしその工場ではどんなお薬でもつくってもよいわけではありません。効果と副作用とを総合的に判断して承認をもらったお薬だけをつくることができます。いままでかぜ薬をつくっていた工場、臨床試験で効果が確認できていないお薬……例えば新型コロナウイルスのワクチンやお薬をつくることはできません。お薬の詳細なつくり方もセットで承認を受けています。

いま起きているのはGMP違反

GMP違反は、なぜなくなるのでしょうか。同じ法律違反でも交通違反と同じに考えることはできません(もちろん大きな事故に繋がるような交通違反は厳罰に処する必要がありますが)。それは、お薬の場合、つくっているのが健康や命にかかわる商品だからです。しかし、今の供給不安定問題から見えてくるのは、言葉では生命関連産業・企業といいながらも、実態がともなっていないのでは、ということです。

業務停止命令と業務改善命令

GMP違反の内容が、データの改ざんや承認の際に記載していない添加剤をつかっていたなど悪質なものに対しては行政処分が実施されます。工場を止めて出荷もできなくなるのが業務停止命令です。もう一つは、工場の稼働を続けることは可能ですが、行政の改善指示に基づいて計画書の提出を求められる、業務改善命令です。

問題の中心は医療用(病院・調剤薬局向け)のお薬

お薬は処方せんがなくても購入できる一般用医薬品とよばれるお薬と、医師の診断に基づく処方せんがないと購入できない医療用医薬品と呼ばれる病院・調剤薬局向けのお薬があります。コロナのように医療用のお薬が品薄になると一般薬を購入しようとする人が増えますので、手に入りにくいお薬は一般用も含めてですが、現在社会的に大きな問題となっているのは主に医療用のお薬と言えます。

廣貫堂さんの例

ドラッグストアや薬局で購入できるかぜ

薬や痛み止めなどの一般用医薬品を主に製造している富山県の廣貫堂さんの事例は、医療用のお薬をつくっている製薬会社さんにもあてはめることができる供給不安定問題の核心部分が含まれています。同社は製造販売承認書にない成分の添加や製造販売承認書とは異なる成分・分量でお薬を製造し、記録も偽造していたとして令和4年11月から12月にかけて業務停止処分を受けました。同社が公表した調査結果によりますと、違反の原因として「事業拡大に伴い、法令遵守・品質保証よりも納期・利益向上を優先する企業風土が醸成されてきた」と分析しています。

一番多いのは製造販売承認書と製造実態のくい違い

お薬をつくる工場の機械が古くなり、その一部を改修したり、あるいは新しい機械に丸ごと入れ替えた場合は、製造販売承認を受けた一部を変更しましたという申請を行って厚生労働省の承認を受ける必要があります。改修も含めて機械を“変える”ことはお薬の品質に影響を与える可能性があるからです。

なぜくい違うのか？

製造販売承認書の製造方法には、例えば有効成分と添加剤を混ぜ合わせる場合、どのような機械を使い何回転で何分間行う、と具体的に記載されています。世界展開しているある大手製薬会社さんは、製造販売承認書の欧米との記載方法の違いについて教えてくださいました。「日本では製造方法や試験方法を具体的に記載する必要があるため、手続きが煩雑で審査などの期間も長い印象がある」といいます。

軽微な変更は年次報告でまとめて行えばよい

ある後発薬品メーカーさんの品質管理に詳しい方が解説してくれます。「日本では製造販売承認書の記載内容から少しでも外れれば、仮に品質には影響がないとしても回収となる可能性があります。欧米では条件を少し変えてつくっても、品質に影響がないことを証明する資料が添付してあれば承認書の範囲内と見なされるようです。そして一定レベル以下の軽微な変更はそのつど承認書を変更する必要はなく、行政に年次報告として報告する義務が課されるとい運用がされている」ということです。

記載レベルのすり合わせを

ある後発薬品メーカーさんによりますと、「お薬の品質を担保するために重要な条件を製造方法欄に記載するわけですが、審査担当官の求めに応じて、必要以上に細かく内容を記載しなければならない例もある」といいます。その結果、品質には影響がない範囲での条件変更にもかかわらず、製造販売承認書と実態が違っていると判断され、違反とされたケースもあるといいます。「承認書にどこまで細かく記載するか、行政と業界とで検討が必要」と話しています。

製造工程の一部変更は1年かかる

製造販売承認書とくい違った製造方法で

製造販売が行われていた場合、一部変更の承認を受ける必要があります。書類を申請してから、審査が終わるまでにおよそ1年かかるとされていますので、その間、供給が止まってしまうことになります。

製造方法の記載内容は見直しが進められている

厚生労働省(医薬品審査管理課)によりますと、製造販売承認書の記載内容はこれまでも合理化を行なってきており、製造方法欄の記載内容についても現在研究班で議論が進められている、ということです。

変更手続きの簡略化も検討課題

業界関係者によりますと、製造方法を変更した場合の変更手続きを簡略化する方向で、審査管理課との間で協議が進められているということです。

バリデーションにより品質の担保が行われている

新しい製造工程でつくってお薬が、それまでつくっていたお薬と同じ品質であることを科学的に確認する必要があります。これはバリデーションと呼ばれている考え方で、何をやるのかということ、これまで製造・販売していたお薬と同じ品質のお薬がつくられていることを検証・確認して、それを文書に残すという作業です。

妥当であることを科学的に確認

変更した製造の流れが予想通り作動しているか、結果として継続して同じものができているかを仕組みとして担保することで、人的なミスや最大限防ぐとともに、人の感情や思い込み、誤った判断を排除することにつながります。この製造方法・工程なら誰が作業をしても同じお薬がつくられているということです。

負担が大きいの事象

なのでバリデーションは省いていいよね、とはならないのは当然ですが、製薬会社さんによると、バリデーションの経費面、時間的な面で大変さもあるようです。製造工程変更の妥当性や変更後にできるお薬の同等性の確認作業がお薬の種類によって違ってくるといいます。具体的には、バリデーション用として多くのお薬をつくらないと検証、確認ができないこともあってお金がかかったり、かなり昔に承認を受けて長い間製造・販売しているお薬は製造工程の変更をする際に変更前と同じであることの証明が難しいとか、活性(効果・副作用とも)が強いお薬は工程の些細な変更でも品質的に同じものをつくるのが難しく、時間がかかるということです。

GMPは国際的にも共通のもの

GMPは国際的にも共通の考え方で、基準も国際間で調和が進められています。厚生労働省(監視指導・麻薬対策課)によりますと、各国の薬事査察当局間の協力の枠組みであるPIC/S(医薬品査察協定及び医薬品査察共同スキーム、欧米を含む全世界54当局が加盟、2022年12月1日現在)に日本も加盟し、GMP省令についてもそこにおける議論を反映させており国際整合性が図られている、といっています。

さらなる緩和を

世界展開する、ある大手製薬会社さんは、「GMP基準が国際的に調和されていることを歓迎しているし、GMPが求める条件も欧米との差は小さくなっている」と話します。加えて「科学的データや合理的根拠に基づき、GMPの運用の範囲で変更管理が可能となるよう、承認書の記載方法や変更手続きも緩和されつつあり、さらに促進されることを期待している」と話しています。

製造・販売が中断するケース1

薬の製造ラインにある乾燥機が古くなり、全く同じ型の機械と入れ替えたとしても、普通は同じ仕様だから問題ないと考えますが、実際に動かすと製造販売承認書に記載してある条件では同じものができないこともあるようです。お薬の品質が乾燥機を入れかえた前後で同じであると証明しようにも試験に必要な数量を確保できていないこととなります。そうすると、一部変更手続きの承認が受けられないため、製造・販売を中止せざるを得ない。それならと、本来必要な手続きをネグってしまうと判断するケースも考えられるといえます。いずれGMP調査でくい違いが確認されることとなります。

製造・販売が中断するケース2

決められた製造工程でお薬ができると、最終的に出荷してよい品質か、製造販売承認書に書いてある品質基準を満たしているかどうか判定が行われます。最後に判定すれば、途中のバリデーションによる製造過程を検証していなくてもよいのではないかと、製造販売承認書の記載内容と異なるつくりかたでも品質が一緒ならよいのではないかと、出荷時に判定基準を満たしているのだからよいのではないかと、などと自分に都合の良い判断を行った結果、GMP違反を指摘され、製造販売がストップしているケースもあるようです。

出荷試験さえ合格すれば

バリデーションの考え方が導入されたのが平成8年です。出荷試験だけ合格すれば出荷できたという体験をもった人たちが、製薬会社さんの上層部にいる年代でしょう。特定の製薬会社さんだけの問題ともいえない可能性があります。廣貫堂さんの「事業拡大に伴い、法令遵守・品質保証よりも納期・利益向上を優先する企業風土が醸成されてきた」という反省は、多くの製薬会社さんにも他山の石とするべきかもしれません。個人も組織も、一定の圧力をうけるとよけいに、ものごとを自分に都合よく解釈しようとする傾向がありますから。

GMP調査は強化

製薬会社の重大なGMP違反事例が続いたのを受け、厚生労働省(監視指導・麻薬対策課)は無通告立入検査の回数を増やし、GMP調査の強化を進めています。具体的な中身をうかがいました。

GMP調査の実施体制や回数については、「無通告立入検査のガイドラインの作成や行政処分の厳格化などを行うとともに、無通告立入検査の回数の増加を調査機関(都道府県、PMDA)に依頼し、調査機関による立入検査の強化を行なってきました」との回答でした。

GMP調査の担当官の質の向上や研修に関しては、「都道府県調査員の質の向上のため、PMDAとも連携し、各種研修や模擬査察、PMDAとの合同立入検査等の教育機会の充実を図ってきました」と回答がありました。

GMP調査の結果に関する質問には、「今年度も行政処分事例が発生しておりますので、引き続き立入検査や調査員の強化が重要だと考えています」と答えていただきました。

変更手続きが必要なことは当たり前

ある大手製薬会社さんは、「品質確保に関する重要な事項はバリデーションで検証したうえで、条件や数値を承認書に記載しており、その変更には製造販売承認書の変更手続きが必要なことが社内でも周知されており対応に苦慮したことはない」と話されています。

生命関連と売り上げ追及

製薬会社さんも営利企業ですので、売り上げや成長が特に重視される局面は当然あるでしょう。しかし、顧客や株主を含めた社会とのつながりを大切にすることが重要です。企業統治という言い方もされ、一般的には法律を守る遵法の精神を会社全体で共有することが求められています。製薬会社の場合は、一般の会社よりもより自制的な運営が本来求められることになるのではないかと思います。社会を裏切らないような社会・経済活動ということでしょう。

品質保証責任者の重要性

製薬会社さんには、品質管理と安全管理の責任者をおいて、それを総括する総括製造販売責任者による3人体制で品質の保証を担保すべきことが法律で定められています。さらに、法律では、製薬会社は総括製造販売責任者の意見を尊重し、法令遵守のために必要な措置を講じなければならないとされています。会社のなかに品質保証の組織は整っていても、不正をしてでも販売を続けるんだという強い力が社内で働いた場合、発言権や不正を食い止める権限がないことには、どうしようもないことはこれまでのGMP違反の事例を見ても明らかです。

制度や組織よりも…

しかし、おそらくそれでも不十分でしょう。歴代の経営トップが不正を絶対にしないんだ、不正をすればいつかばれて会社の存続はないかもしれない、という企業倫理の土壌を根気強くつくっていくしかないのでしょう。

定着しない品質保証責任者

取材に対してある大手製薬会社さんからは「品質保証の責任者は定着しないという認識をもっている」と答えていただきました。加えて、組織における品質保証責任者の支援や補佐を行える組織、体制づくりが課題になるとのことで、大手の製薬会社さんでも、品質保証部門の位置づけは相対的に低いのではないかと思います。回答でした。

品質管理に必要な人員は増加傾向

ある後発薬品メーカーさんからは、「品質保証のための3人体制はとれているが、

品質管理の現場担当者が足りないし、業界内での需要も多い」との回答でした。背景には後発薬品メーカーさんは年々後発薬品を新発売し、品目数が増える一方で既存の後発薬品はそのまま販売を続けたこともあり、品質管理業務が増えているといえます。これは他の後発薬品メーカーさんも同じことがいえるのだと思います。

品質管理をできる人材は奪い合い

加えてGMPの国際調和の流れで品質管理業務にはより厳格さが求められるようになり、人員もより必要になっているということです。さらに製薬会社の工場は地方にあるケースが多く、地方の限られた労働市場の中で奪い合いがおきているのは事実だといえます。

経験豊富な品質保証人材の確保に苦慮

別の後発薬品メーカーさんからは、「20年以上経験のある人、10年未満の人、入社したばかりの人、それぞれ役割は異なるため、人手が足りないという急激に増員しても品質管理業務は機能しない」との指摘がありました。そして高度な判断を要する経験豊富な品質保証人材はどこに製薬会社も確保するのに苦慮しているといえます。

性格、人柄も大切

さらに、品質保証責任者やそれを補佐する人材は知識や判断力はもちろん必要ですが、製造部門と寄り添ってアドバイスを行えるようなキャラクターである必要があるといえます。製造部門で何か問題が起きた時に相談や報告がしにくいと隠ぺいや捏造につながりかねないのだといえます。品質保証部門の責任者の資質は企業の信頼性を大きく左右することになると指摘します。

品質保証責任者の確保は業界の課題

また別の後発薬品メーカーさんの品質保証部門の責任者の方からは、「責任感と使命感が資質として必要だろう」と答えていただきました。お薬の供給不安定はしばらく続きそうな雲行きです。あいまいな出荷判定を行い、混乱を広げることがないように、品質保証の責任者の育成と確保は業界全体で早期に取り組むべき課題となりそうです。

不安定な供給がながびきそうな理由

イメージとしてとらえられるよう、あえ

ておどろばな数字で示します。後発薬品は年間800億錠がつくられていました。そのうち120億錠は日工工さん、30億錠は小林化工さんがつくっていました。そのうち製造販売を完全にやめた小林化工さんの分と日工工さんの一部を合わせた数十億錠分の穴があきました。雲のたとえで言うと、ばらばらに小さな雲が霧があった空に、突然大きな雲が出現したことになります。その後それを中心に雲はぐんぐんと大きくなっていくことになります。

原薬調達にも苦戦

他の製薬会社さんがなんとかその雲を雲散霧消させようと工場をフル稼働に近い形で増産体制を続けていますが、原薬を自社でつくっている後発薬品メーカーさんは少ないため、増産するには原薬の調達が必要になります。何とか原薬調達にめどがたちつつあったところに新型コロナパンデミックの影響が重なりました。

新型コロナ需要が加わり手足をしばられた状態

解熱鎮痛薬やかぜ薬の需要(処方)が増えたことで、年間の必要錠数が800億錠よりも大きい数となってしまいます。後発薬品メーカーさんの工場は市場拡大を受け、生産計画はそもそも過密スケジュールであったところに穴埋め分とコロナ関連分を優先的に生産しなければならず、徐々に手足をしばられていきます。

見逃せない長期処方の影響

医療機関の処方にも変化がありました。状態の安定している患者さんには一度の処方でも数か月分という長期処方が増え、各後発薬品メーカーさんは生産計画の調整を余儀なくされることとなります。新たに加わったいくつもの要因がジワジワと増産体制をとっている製薬会社の足、腰にダメージを与えている状況です。

解熱薬、抗生物質の原薬は世界で奪い合い

新型コロナパンデミックのもと、世界的に解熱・鎮痛薬や抗生物質の需要は伸びているようで、それらのお薬の原薬は世界中で奪い合いが起きているそうです。特定のお薬に関しては原薬が予定通り入ってこないケースが増えています。

31社、1200品目は薬事対応が必要

ジェネリック医薬品製薬協会は令和3年に加盟企業に自主点検を要請しました。点検の内容は、供給不安の大きな原因となっている、製造販売承認書と製造の実態のくい違いの有無です。38社のおよそ7700品目についての確認が行われた結果、31社のおよそ1200品目で薬事対応が必要になるとのことでした。

残り800品目は行政の判断待ち

これまでに、行政の判断が確定しているのが約400品目で、残りの約800品目について、届け出だけで済むのか、一部変更の申請が必要となるのかは今後判断されることとなります。厚生労働省と業界との間で製造方法の変更手続きが簡素化の方向ですすめられているとされますが先は見通せません。

ブナの森調剤薬局 鈴木 康久

(追記1) 令和4年8月末時点で、出荷が止まったり、販売数を制限しているお薬の数は販売されているすべてのお薬のおよそ3割にあたる4000品目、後発薬品に限ってみると9000品目のうち3800品目の供給が滞っているというデータがあります。異常事態を裏付けるデータです。一方業界団体の調べでは、病院や調剤薬局が必要なお薬を必要だけいつ注文しても滞りなく買うことができた数年前よりも、最近の方が約5%多く生産されていました。需要の変化を考慮しても流通(製薬会社、問屋、病院・調剤薬局)のどこかで極端に在庫を抱えているところがあることを示唆するデータです。何とか早期に供給不安を解消したいと増産体制を続けている業界関係者は、「業界全体で生産量をもう少し増やせば出荷制限を解除できるところまできている。医療関係者の方は買いだめを控えていただきたい」と訴えています。

(追記2) 今回の記事の中で書く予定でした医薬品産業育成策に関する部分は記者の力不足のためとめることができませんでした。それに伴いまして記事のタイトルから「国内医薬品産業は必要か？」を外しました。このテーマにつきましてはあらためて取材し、記事を掲載したいと思います。



TBS 報道特集ディレクターの川上敬二郎さんの「いじめ予防100のヒント」より。

**第14回「鬼ばば作戦」「フロリダ作戦」子どもの“脱スマホ依存症キャンプ”に密着
スマホを手放す秘策と意外な効果**

兵庫県立大学の竹内和雄准教授(生徒指導論)らが小・中・高校生1万人近くにアンケート調査(「OSAKAスマホアンケート2021」)を行った結果、男女を問わず中高生の3割以上、特に男子高校生の4割以上が「4時間以上」ネットに接続していました。

「4時間以上」の子は夜12時より遅く寝る子が半数以上、そして4人に1人は「よくイライラ」しているという結果でした。

「ネットでケンカ」した経験も「4時間以上」の子は「4時間未満」の子の2倍でした。こうした人間関係のトラブルは「ネットいじめ」や「リアルいじめ」につながるケースも多く、竹内准教授は「スマホ依存からの脱却は、実は“いじめ予防”対策でもあるのです」と語っています。

報道特集は1年前、竹内准教授が主催する「脱スマホ依存キャンプ」に密着し、「スマホ依存の子供たち」と題して放送しました。放送では、神戸市の中学1年生女子の神木希さんに密着取材をしました。小学6年生の時からスマホを使い始めた神木さんは、長い日には1日6時間以上、深夜1時までスマホと向き合うこともあるそうです。はまっているのは複数の友達と同時に会話ができる通話アプリLINEで、本人もよくないとわかりつつも会話から抜け出すき

かけがつかれないことに悩んでいました。

竹内准教授が企画した「人とつながるオフラインキャンプ」はネット環境が悪い瀬戸内海に浮かぶ島で行われました。スマホやオンラインゲームなどネットとの関係を見直したい小学生から高校生までの20人が4泊5日のキャンプに参加しました。

キャンプに参加した神木さんは10時までにスマホをやめたいと目標を設定すると、キャンプで多くの人の前で発表したり話したことで自信をつけることができ、友達とのLINEも「お風呂に入るから」と抜けやすくなったと話しています。

神木さんには、キャンプで竹内准教授から教わった二つの作戦も参考になったようです。一つは、「ごめん」時間たったからお母さんが怒っている」と断る「鬼ばば作戦」です。もう一つの「フロリダ作戦」は「お風呂に入らなくちゃ」と断る会話から抜け出す(離脱する)「風呂離脱」作戦です。

キャンプに参加するすべての子供たちがキャンプで立てた目標を達成できるわけはありません。竹内准教授は、スマホ依存の子供たちの多くが、親との関係や友達との関係などで悩みを抱えていて、それを避

けるために彼らはネットに逃げ込んでいるのだから、現実の悩みを解決しないことにはネットとの付き合い方は変わらないのだと強調しています。

川上さんは「こうしたキャンプなどを通して、より多くの子供たちがスマホ依存からの脱却のきっかけをつかめる機会を提供できるよう、国も大人たちも協力が必要だ。スマホ依存からの脱却が“いじめ予防”にもつながるならなおさらだ。こうした多様な側面から、子供たちの未来を支え続ける仕組みが求められている」と結んでいます。

ブナの森新聞はいじめを考え、議論していく「いじめをとめよう」というコーナーをつくりました。いじめで悩んでいる方にとって、学校内には保健室がありますが、地域の中にもたくさん逃げる場所が必要だと考えます。その一つになればと思います。悩んでいらっしゃる方は、遠慮なくご連絡ください。そして、学校関係者の皆さん、一般の方もいじめを身近なものにとらえ、いじめを“とめる”ために議論し、情報交換していきましょう。記事へのご感想、ご意見のほか、些細なことでもいつでもご連絡ください(suzukiyasuhisa@gmail.com)



平源旅館（横手市）。何故か高校生のオレが、秋田に向かう汽車に乗っていた…。恥ずかしい話だが、秋田の横手に住むという一人の女性に会いに行くため、いや探しに行くためきのう夜遅く上野発の鈍行列車に乗ったのだ。

当時オレは、神田神保町のとある製本屋で友人達と製本作業のバイトをしていた。給料は1日980円（時給ではありません。日給です）だった。その時、その女も秋田から出稼ぎでその製本屋に働きに来ていた。

背丈はそれほどでもなかったのだが、可愛さの中にどこことなく大人の雰囲気をもっていたところに惹かれたのかもしれない。それにしても、何故、名前も住所も知らない（高校生がそんなことを聞けるわけがなかった）その女に会いに汽車に飛び乗ったのか。当時上

野、横手間の汽車賃がいくらだったのかの記憶すらないが、変な高校生だったと思う。

各駅停車の秋田行きだ。50年以上前のことではっきり憶えていないが、秋田まで24時間くらい汽車に乗っていたと思う。

ちょうど汽車が板谷峠のスイッチバックの登りにあえいでいる時だった。ようやく故郷の匂いもして来たからか、前に座っていた初老で「仕事人、風の男が話しかけてきた。酒が回ったせいもあったのだろう。」

内容は覚えてないが、男は東京での自分の仕事ぶりや、生きていくことについて話していたように思う。出稼ぎ、きつい仕事…。高校生とはいえ時折うなずいたりしてそれなりに話し相手に

なっていたかもしれない。

当時17歳、1965年は東京オリンピックの翌年だ。この国に生きるたくさんの日本人を巻き込んで列島は熱く沸騰していた。出稼ぎ、季節労働者とはいえ、故郷に帰ればそれなりの田畑、家作はみな持っていたに違いない。

酔いの回った男の窓越しの向こうにちょうどループの登りに差し掛かった汽車の後方が弧を描くのが見えた。何故こんな、テーマも希薄で取り留めもないことを書いてるのかということ、北島三郎さんの「ギター仁義」という歌だ。その三番の歌詞に「…手前、宿無しスズメの流れ者にござんす。って歌詞がある。「宿無し、で「流れ者、のスズメ（雀）、ものすごく辛く追い詰められた状況だ。ただこのスズメにはギターと歌唱力という武器があったわけだけだ…。」

出稼ぎ、季節労働者、流れ者、漂泊。そして生きづらさ、息苦しさ。ますます非正規労働者の増えていく現在の日本。もしかして流れ者にさえない、空間を無くした、たかだか狭い「世間（世界じゃない）、でどうやって生きていくのかを考えた時に押しつぶされそ

うになる。

世界はとっくに難民、移民、ディアスポラ（diaspora/ 離散民）という形で「自国民、という人間をはじき出している。はじき出しながら、出されながら、明日の手がかりを模索している。そうなるのが嫌でボくら日本人は我慢を重ねるのか。重ね続けたその先に何があるのか。

それとも他に選択肢があるのか。誰にも何にも、その先すら見えない。今の日本からは次の日本は生まれえない。どこから生まれるのか。それ（日本）は、世界からしか生まれえない。もっともっと世界と本当に真摯に向き合わなければ。

そうだ、追いかけて汽車に飛び乗った横手の美人のことだ。彼女の言葉で聞いた駅前（横手）の平源旅館という言葉が唯一の手がかりに冬の横手に降りた。たしかに堂々と平源はあった。旅館は見つけたがオレはそこから先は一步も進めなかった。吹雪が目の前の通りすら掻き消していた。今思うと吹雪はあらゆるものを受け入れ、あらゆるものを拒んでいたのではないだろうか。50年以上の時空を超えて。



初めまして。山形市生まれの齋藤伸也と申します。タイのバンコクに住んで28年がたちました。数年前に「やまがた特命観光・つや姫大使」を委嘱され、山形県タイ友好協会の理事も拝命しました。以来、山形県とタイ王国の友好親善、経済連携強化などのお手伝いをさせて頂いております。

近年はタイ人スキーヤーを蔵王に招致するインバウンド活動に力を注いでいます。インバウンド活動を行うにあたってはタイ人のスキー客のみならず広く海外の方々に山形の魅力を知ってもらおうと観光資源の発掘を行っています。その活動の中で気が付いたことがありました。それは山形県が武道県であるという事実です。

村山市に「居合神社」という神社があります。出羽国林崎（現村山市）で生まれ居合道を確立した室町時代末期の剣客、林崎甚助をお祀りする神社で、ここが居合道発祥の地とされています。

神社の隣には振武館という道場があり居合道を体験することができます。

この体験コースは観光庁が推進する「スポーツ文化ツーリズムアワー2020」の武道ツーリズム賞に選ばれました。そのためか外国人観光客には良く知られているようです。神社の周りには外国語の標識があちこちにあり日本語標識より多いくらいなのです。

他にも武道県と呼ぶべきことがあります。高校剣道では男子は酒田光陵高校、女子では左沢高校が全国トップレベルの強さ。東京オリンピックでは山形市がタイの柔道ナショナルチームのホスト・シティでした。米沢市がホスト・シティになった香港のフェンシングチームは男子個人で金メダルを獲得しています。

合気道の世界では船越光雄師範と云う日本有数の指導者が山形市にいらっしゃいます。そういえば横綱柏戸（注1961年大鵬とともに横綱に昇進、柏戸鵬時代を築いた）は鶴岡の出身でした。元関脇琴の若の佐渡ヶ嶽親方は尾花沢出身、その息子さんの現琴の若は3役を狙う地位までできています。

最近とくに注目されているのがタイの国技ムエタイです。山形市のムエタイ競技団体は山形県スポーツ協会の正式加盟団体になっており、タイのタイトル保持者であるムエタイ選手2名をトレーナーとして招聘、山形の若手選手たちの育成に取り組んでいます。2022年7月には山形駅西口広場でムエタイの演武、体験イベントを開催しましたが、佐藤孝弘山形市長が飛び入り参加されるなど盛会でムエタイへの関心を高めることができたと思います。

ムエタイ競技は早ければ2028年のロサンゼルス大会か2032年のブリスベン大会で正式種目に加えられる可能性が高いです。もしそうなれば本場タイのチャンピオンに鍛えられた山形の若者が日本代表として選ばれることも夢ではありません。



山形県では2019年に県下の武道競技団体9団体（弓道、柔道、柔剣道、合気道、なぎなた、相撲、少林寺拳法、空手道、剣道）が合同で山形県武道協議会を結成しました。2022年3月に



スポーツチャンバラ

は第1回山形県武道祭りが開催されるなど、県をあげてスポーツとしての武道の普及、振興に取り組んでいます。

武道というと、道を極めるというイメージがどうしてもあって敷居が高いかもしれません。最近ではスポーツチャンバラという競技が新たなスポーツとして認知され始めています。この競技は面、籠手、盾と云ったプロテクターで防護しソフト剣で撃ち合うので安全です。2022年のとちぎ国体でデモンストレーション・スポーツとして紹介されたほか、全国大会、世界選手権大会なども行われるようになってきました。

この種のイベント、大会を積極的に招致し開催することで県民に武道への関心をもってもらい、山形県をスポーツ武道県として差別化していくというのは、ありかも知れませんが。近年各地でマラソン大会が催され全国からランナーを集めています。スポーツチャンバラ全国大会を開き、試合後には参加者全員で芋煮会、なんてイベントはどうでしょうか。

齋藤 伸也